



記録動画
(YouTube)

「音気楽団—機—の妖精にきく—」 音が生まれ、風景が動く

— 特別対談（鈴木昭男さん、宮北裕美さん、山添町長） & 記録動画公開のお知らせ —

京都:Re-Search 実行委員会（京都府、与謝野町ほか）では、京都府域各地でアーティストの視点を通して地域の魅力を見つめなおす地域プログラムを実施しています。

今年度、丹後地域では、丹後在住約40年で2024年に与謝野町へ移住したサウンドアーティストの鈴木昭男さんを中心に、機道具を“楽器”として再解釈する『音気楽団—機—の妖精にきく—』をワークショップ「はたおと・さぐり」とパフォーマンス「はたおと・あそび」の2部構成で、令和7年9月から10月にかけて開催しました。

このたび、活動の記録動画の公開に合わせ、鈴木さん、同じく与謝野町在住でプログラムにゲスト出演した宮北裕美さん、そして、山添町長に、活動の振り返りと与謝野での暮らし・文化についてお話を伺いました。



©bozzo

図 産業観光課 ☎ 43-9012

活動を振り返って

機道具が

「楽器」になる日

（山添町長、以下「山添」）

与謝野町の回では、Amanohashi Date Terrace Coffee でのワークショップ、丸仙株式会社での工場見学、実相寺でのパフォーマンス、そして今回の記録動画を拝見し、どの場面も本当に幸せな気持ちになりました。私たちに与っては当たり前にある風景、織物を織るという行為として捉えていたものが、機道具で音を出すことで、音と音をつないでいく、それが人と人との関係性を紡いでいくところにつながり、織物という世界を通してまた違う風景を拝見しました。

また、子どもたちだけでなく、大人の方の表情がいきいきと変化していく様子が印象的でした。フィナーレでの昭男さんの表現を見て、こういう一面もあるのだとうれしくなりました。

（鈴木昭男さん、以下「鈴木」）

普段は「きくこと」を重んじていますが、今回は自分でも驚くほどに変身しました。皆さんが夢中で音を

音がつなぐ一体感

（鈴木）カエルの合唱のように、上手い下手ではなく「個々の生きた音」が重なっていく。自然な合奏のおもしろさを共有したいと思いました。

（宮北裕美さん、以下「宮北」）

機道具を楽器にするのは誰も経験がないことで、大人も子どもも全員が「ゼロ地点」からのスタートでした。正解がないからこそ、自分の楽しめる音を追求めてきて、すばらしい演奏になったのだと思います。

道具に宿る「記憶」を持ち帰る

パフォーマンスの最終会場となったオリーブ畑（Rubenari Field）の本杉の麓（宮津市）では、鑑賞バスツアーの皆さんが一日同行されていたこともあり、会場全体に一体感が生まれました。

（宮北）「自分も参加したい」という空気が会場を経るごとに高まり、最後の会場でその場にいる皆さんが機道具を持って、自然に演奏に加わることが印象的でした。どの道具に

も魂が宿ったようで、大切そうに持ち帰られた姿が忘れられません。

与謝野の日常と文化

移住者の視点が

教えてくれること

（鈴木）与謝蕪村、与謝野鉄幹・晶子など、文学的な人たちの里でもあるので好きですね。家からは大江山

や磯砂山が見え、四季折々の景観が素晴らしいです。須代神社のみようが祭もおもしろいですね。子どもにぎやかさも感じられ、ご近所の方も優しい人ばかりで恵まれていきます。住みやすいですね。

（山添）地域の文化的な営みや、ご近所の皆さんとの付き合いを通して、お2人の独特の視点で地域を見ていただいていることは、私たちに大きな気づきを与えてもらえるものです。もっと日常を大切にしないと

風景が毎日の一部になる

（鈴木・宮北）クアハウス岩滝によく通っています。対応がすばらしく、清掃も行き届いていて最高です。ジムのマシーンも充実していて通っています。

（宮北）加悦谷平野を散歩したり走ったりしていると、コウノトリに出会ったり、早朝に隣の家も見えないくらい深い霧の真っ白な世界からまじが浮かび上がって見える場面や、二重の虹に出会えたりと幸せです。丹後の冬は厳しいけれど、同時に美しいです。

（鈴木）ニワトリの鳴き声や日々の草花の変化を見られたり、静かで音を聞くとか、裕美さんの身体を鍛錬するのに良い集中をもたらしてくれそうです。食べ物はどこにも勝りません。空気もおいしいし、全部気に入っています。

（山添）あるものに目を向ける大切さを改めて感じます。

文化とは？

（山添）人々の営み、生き様みたいなことを考えるときには、町役場全体の業務が文化に関連していることを意識しておくことが大切

だと思っています。日常の中にある幸せに目を向けていくことが、文化の基本だと思っています。

（鈴木）遊び心だとか、余裕みたいなのが文化を育てる土壌になると思います。

（山添）遊び心のある大人になるためには、どうしたらよいですかね。

最後に記録動画が残すもの

（宮北）音楽もダンスも、その瞬間に立ち会わなければ残らない表現です。今回の動画は、その「片鱗」を残してくれる大切な記録。ぜひ多くの方に見てほしいです。

（鈴木）ドローン撮影やアングル・ワーク、参加者の皆さんの音やリズムの捉え方が抜群で、大満足な作品に仕上がっています。

（山添）日常を別の角度から体感できる作品です。驚きとともに楽しんでいただけたらと思います。ぜひご視聴ください。



宮北 裕美 (左)

アーティスト
イリノイ大学芸術学部ダンス科卒。舞台芸術の出演や振り付けを経て、立つ、歩く、座る”と言ったシンプルな動作、身の回りのモノや現象にダンスを見出し、即興パフォーマンスや視覚芸術の可能性を探る。2012年から丹後半島に拠点を置き、浜で採集した自然の石を打つダンス「Nutu (ヌトゥ)」を創始、国内外で上演。近年は公共の場や自然環境などでさまざまなパフォーマンスを手がける。2024年5月から与謝野町在住。「音気楽団」では、ゲスト出演として「おひめの舞」を伊根・宮津会場にて披露した。

鈴木 昭男 (中央)

サウンドアーティスト
1960年代の〈なげかけ〉と〈たどり〉のコンセプトによる自修イベントの体験の中から、エコー音器 ANALAPOS (アナラポス) を創作し、演奏活動を展開。1988年に、〈一日の自然に耳を澄ます〉「日向ぼっこの空間」を、日本標準時子午線の通る京都最北の丹後の山中で遂行。1996年、ベルリンで発表した巷に耳を澄ます「点音 "o to da te"」を、世界各地で継続している。即興演奏家としても知られる。1987年丹後に移住。2024年5月から与謝野町在住。「音気楽団」では楽団長を務める。